令和７年２月３日

日立理科クラブ通信

Ｎｏ．２３９

日立理科クラブ

「理科室のおじさん」を訪ねて２　日立市立豊浦小学校

「理科室のおじさん」上原勝彦さん

今回の「理科室のおじさんを訪ねて」は、豊浦小学校（横山宏栄校長）の上原 勝彦（うえはら　かつひこ）さんです。

上原さんは、熊本城や「くまモン」で知られる熊本県の出身です。子どもの頃は、よく野山を駆けまわっていて、運動会のリレー競争が大好きだったそうです。

理科クラブに入る前は、日立製作所日立工場で大型発電機や電動機の「検査の自動化」に取り組んでいました。試運転でアメリカ（シカゴやコロラド州）に出張したこともあります。

また、上原さんは１９７８年から１９８０年にかけて、２６歳のときに越冬隊員として南極に派遣されたそうです。仕事は設営部門の機械担当で重要な仕事でした。その経験を小中学校から依頼があり、話すこともあるそうです。南極まではどのように向かうのか、南極での仕事はどんなことをするのかの他に、南極の厳しい寒さやアデリーペンギン、アザラシ、オーロラのこと、太陽が一日も顔を見せない時期があること、反対に沈まない時期があることなど、南極の自然の様子を写真や動画を使いながら話します。児童生徒からは「ペンギンはなぜ集団で暮らしているのですか」「南極でもＬＩＮＥは使えますか」など、多くの質問が寄せられますが、おもしろいのは、質問が時代によって変わることです。上原さんにも即答できない質問があって、よく調べて後日回答するそうです。

昭和基地の5月末、6月から約1か月半太陽とお別れ

昭和基地では12月から約1か月半太陽は沈まない

南極から戻ってすぐの頃に、冒険家の植村直己さんの講演を聞いたことがあるそうです。植村さんは南極大陸単独横断という夢をもっていて、夢の実現のために、北海道から鹿児島まで３０００km 歩いたそうです。そこで、上原さんは、その１/１０を歩いてみようと、名古屋駅から東京駅までを６日間（３１０km、５０万歩）で、炎天下の８月に完歩したことがあるそうです。とても行動的ですね。

シンクの蓋を作製（8 台）

理科室のおじさんになって、学校では、「理科おじさん」、「上原先生」と呼ばれ、児童にとても親しまれています。いつも理科室で、実験の準備をしています。この日は、４年生、５年生、６年生が実験をしやすいように準備を整えていました。準備した実験で児童が真剣に取り組んでいる姿を見たり、児童や先生方からお礼を言われたりするとやりがいを感じ、とてもうれしくなるそうです。

科学遊びコーナー

理科室の実験台にはシンクがありますが、水を使わないときは、実験台を広く使えるように蓋をつくったそうです。また、児童が理科に興味をもつように科学おもちゃを置いて、学習しやすい環境づくりを進めています。

上原さんは、仕事の経験から、無秩序な状態を放置すると、それがエスカレートして、より深刻な事態を招く（『割れ窓理論』）ことから、理科室・準備室を常に整然としておくように心がけているそうです。また、何事もやりっぱなしではなく、実験して「どうだったの？」などと聞くようにしています。失敗したら原因を探して次につなげていく、学習の仕方を身に付けてほしいと思っています。

理科室に掲示の『学習のし方』⇨

最後に、豊浦小学校のよさを聞きました。たくさんありますが、一つは、伝統的な「元気なあいさつ」と話してくれました。建屋も新しく学習に恵まれた環境で、児童はのびのびと学校生活を過ごしています。

文責　日立理科クラブ　作間　忍　日立理科クラブ事務所　TEL/FAX　0294-24-3104